優秀賞

遠回しの愛

宮城県仙台市立七郷中学校
三年　渡邊里穂

ふと窓に目を向ける。なんとなく窓の外が気になり、カーテンを開けた。小粒の雨がぽつりぽつりと落ちてくる。まるで涙のようで私はあの日を思い出す。

私は小さいときから祖父が嫌いだった。

「おい飯と言っているだろう。」

「風呂沸いたぞ。聞こえなかったのか。」

など私には必要最低限の言葉しか話してはくれなかった。無愛想で全く笑わない祖父と私の距離は少しずつ開いていった。

なぜ祖母は祖父と結婚したのだろう。疑問が生まれ、祖母に聞いてみた。祖母は首を少し傾けて笑顔で答えた。

「あの人の見えないところに引かれたの。昔から不器用なのよ。わかりにくいでしょう。」

私はますますわからなくなり、考えることをやめた。何週間、何カ月を経ても祖父のことを好きになれるきっかけや出来事は一度もなかった。祖父は私にとって「怖い人」。いつからか関わらないようにしよう、と心に決めた。

九歳のときである。家の電話が鳴り、両親があわてて何かの準備をして家族全員で車に乗った。子供の私でも悪い予感を感じた。目的地について、ようやく母から話してもらえた。祖父が病気で亡くなったのだ。理解して現状を受け入れることができなかった。胸の奥に複雑ではっきりしない感情が入り混じっていた。それは波になり、私に襲いかかってきたが、目からは一粒も涙は流れなかった。

葬儀が終わり、外に出るとパラパラと雨が降って私のほおを濡らした。私の代わりに泣いているようだった。

あの日から三年。私は小学校を卒業する時期となった。これまで祖父を思い出したのは、祖母の家に遊びに行ったときだけといっても過言ではない。新しいスタート、新しい生活に期待が高まるばかりだった。

私は身の回りも心もスッキリとした状態にしようと、部屋の掃除を始めた。拭いたところは昔のように艶を取り戻してきた。この調子で押し入れも開けようと手を伸ばした。

中を探ってみると昔大切にしていたぬいぐるみや、なくなったと思っていた漫画が出てきた。山のようにある「思い出」の整理を進めていくと、奥に小さな箱がチラリと見えた。

取り出してみると、ほこりが積もっていて色あせている。私の中で単純な興味と好奇心が膨らみ、びっくり箱を開けるような感覚でふたを開けた。

すると、何十枚もの写真が床に散らばった。

「私とお母さんが写っている。」

私と母の幼いころの写真が箱いっぱいに詰められていた。裏には、一枚一枚違うメッセージ。メッセージの文字には特徴があり、すぐにわかった。「この箱は誰のものか」を。

目頭が熱くなってきたことがわかり、深呼吸をして写真をめくる。

祖父と遊園地に行ったときの写真。自転車の練習中、祖父が私を支えてくれている写真。私の誕生日をお祝いしている写真。

すべての写真の中には、太陽のような笑顔の祖父が写っていた。こんな笑顔の祖父、見たことがない。違う、見ようとしなかったのだ。祖父を敬遠しなければ、写真のような祖父を見ることができたかもしれない。

正面だけを見て、祖父の裏側に隠れていた愛を見つけられなかった無力さと最後まで感謝の気持ちを伝えられなかった悔しさが、私の心を痛めつけた。

「おじいちゃんに会いたいよ。謝りたい。」

叶わない願いが次々にあふれてきて、箱を抱えたまま大粒の涙を流した。胸が痛くて痛くて、たまらなかった。呼吸が荒くなり、心の中の感情をすべて出すように大声で泣いた。私の涙が写真の上にポタポタと落ちて、まるで写真の中に雨が降っているようだった。

優しさと温かさが詰まった宝箱は今、机の引き出しに大切にしまっている。つらいとき苦しくて逃げたいときに箱の中をのぞくと、安心感とぬくもりを感じることができた。今の私があるのは、この箱のおかげだと断言できる。たくさんの写真たちは、私に力強い勇気と輝かしい希望を与えてくれた。

これから私の前には、高い壁が何度も立ちはだかるだろう。一歩も進むことができなくて、心が折れてしまうこともあるかもしれない。

しかし、私は諦めない。私は一人ではないから。そして、祖父からもらった力を無駄にしないために。

祖父の残した写真は私の生きる考え方を変えてくれた。何百の言葉でも、何千の文字でも、この感謝の思いを全部は伝えられないだろう。

私はときどき、箱のふたを少しだけ開けて誰にも聞こえないように小声で伝える。

「おじいちゃん、いつもありがとう。」